

IV 情報・資料

1. 1963年度北太平洋沿岸に於ける

異常海況による鯨漁場の変動

渡瀬節雄 (大洋漁業株式会社)

(1) アメリカ側

カナダバンクバー島コールハーバー根拠の捕鯨は操業開始当時の5月は非常に海況良好で、ナガス鯨も多かつたが、7月中旬頃から全然鯨の発見がなくなり、為に捕獲数も前年度を下廻る結果に終つた。

その主なる原因は、

イ. 5月下旬からソビエト・ロシア号船団がカナダ近海で操業した。特にケーブセントジェームス附近では、ソ連カナダ両国捕鯨船が混船した。この為鯨漁場が荒らされた。

ロ. カルフォルニヤ海流が異常状態で、その為カナダ沖の盛漁期の水温は前年より、5~8°F 高かつた。逆にアメリカ側は7~8月の水温低く、この為捕獲される鯨種は、例年ならナガス鯨が多いにも拘らず、今年はイワシ鯨とマツコウ鯨が多かつた。

等が上げられている。

尚カルフォルニヤでは現在 Del Monte Fishing Co., と Golden Gate Fishing Co., の2社が何れもサンフランシスコ湾に根拠地をもつて、夫々2~3隻の捕鯨船を以て操業しているが、米国の The Marine Mammal Biological Laboratory of the U.S. Fish and Wildlife Service と、Bureau of Commercial Fisheries の調査によると、

米国西岸沖合で捕獲されるイワシ鯨の食餌の10%以上はSauryで、このSauryは日本近海のものと同種のCololabis Saira であるということである。

(2) アジア側

今年7月までの日本近海の家況は、異常低温を示していた。従つて、三陸沖では沿岸寄り親潮前線が例年より南下して居り、且つ黒潮主軸の南偏もあつて、寒冷水系の鯨の捕獲が多かつた。従つて暖水系であるニタリ鯨の来遊は少なく遅く、昨年6月119頭捕獲あつたものが今年は6月6頭、7月2頭、計9頭と昨年の10分の1に過ぎない。

又冬季季節風の吹送強く低温化した沖縄近海では、1~3月に於いて操業したが捕獲無く発見も皆無に等しい状態であつた。

8月に入り漸く平年並みの海況に復し、オホツク海に於て7月6頭、8月7頭、計13頭のナガス鯨の漁あり(昨年は6月に2頭のみ)。冷水種の来遊が例年になく目立つた以外は8月はニタリ鯨102頭(昨年187頭)の捕獲があり、イワシ鯨177頭(昨年286頭)中に占めるニタリ鯨の割合が多くなつた。マッコウ鯨は283頭(昨年242頭)で特に金華山近海の漁場が活発化した。9月に入り黒潮の増勢により、暖水塊の異常発達あり、ニタリ鯨が近年になく多く15頭捕られ(昨年11頭)た他、北海道沿岸の親潮の強い海域及び親潮前線附近に於いてマッコウ鯨が例年に比し沿岸寄りで漁があつた事と雄の群が多かつた事等が目立つた特徴であつた。

10月に入り、各社共南鯨へ出漁する為捕鯨船を切揚げたが、それでも急激なる親潮の沿岸寄り南下により、ナガス鯨29頭(昨年5頭)イワシ鯨42頭(昨年35頭)とヒゲ鯨の捕獲が伸びたが、マッコウ鯨はサンマの漁場に似て分散し、沖合沿岸と漁場が一定せず例年になく10月は漁が

良くなかつた。

総体的に見て今年の特徴はナガス鯨多く、67頭（昨年39頭）イワシ鯨少なく（之はニタリ鯨の不漁による）、マッコウ鯨は平年並みであつたが、ツブが揃つていたのが目立つた点である。

日本近海捕鯨漁場の特質として

イ．親潮域即ち寒流域が余り広く拡張するところは漁場として不良である。例として今年の沖縄、紀州沖、東支那海等の漁場が冬季強い季節風により低温化し、低温域沿岸から沖合へ拡張したので、その為に不漁であつた。

ロ．鯨漁場と言うより、鯨の棲息海域はマッコウ鯨に於ては純親潮域系、親潮前線系、黒潮前線系の3系統、イワシ鯨に於ては親潮前線系と黒潮前線系の2系統があると考えられる。之等の鯨は夫々前線を東西に回遊していることは明らかで、この為に沿岸の鯨資源は年々の捕獲努力の増大と長年の操業にも拘らず、その資源は維持されているのである。（このことに関しては鯨研通信に発表）

従つて今年の如く4～7月親潮強く、親潮前線が南下し、黒潮南偏時は親潮前線上に冷水系の鯨種が多く見られ、8月以降黒潮の勢力持ち直しによりマッコウ鯨の好漁、ニタリ鯨の北上が見られたわけである。そして10月以降は再び親潮前線の急速な南下により漁場と鯨種が急変したのである。

以上の如く今年の異常海況と黒潮親潮の大きな動きは鯨漁場とその鯨種を変えたことがその特色となつてあらわれている。